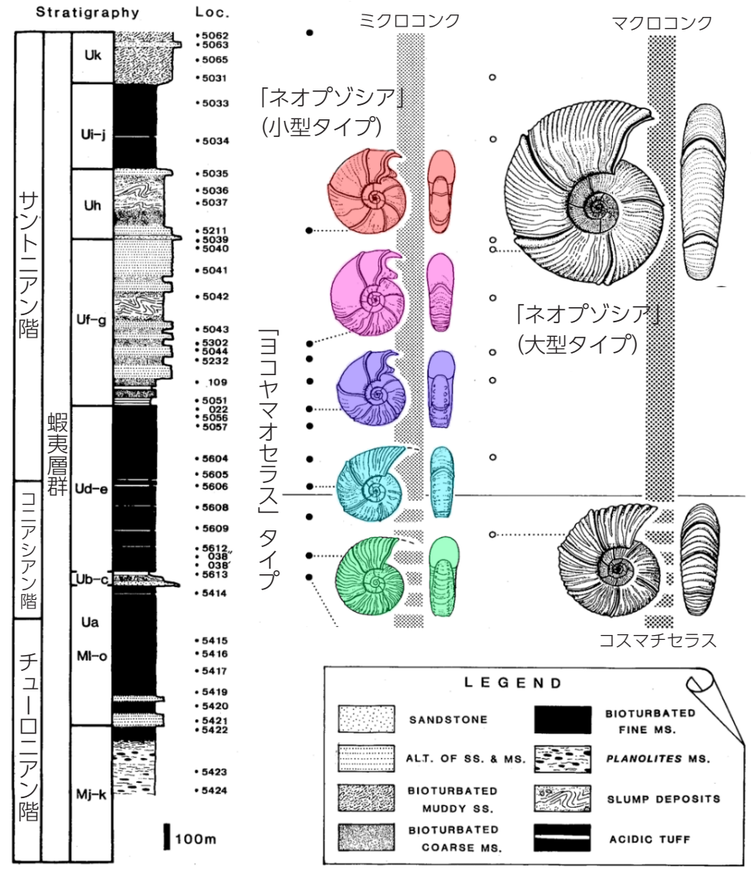
“しばらく相別れ、それからまた一緒になることは、さしつかえない”

ヨコヤマオセラス

日本から見つかるアンモナイトの中でも，ミクロコンクとマクロコンクに関して初めて詳しく研究された種類が「ヨコヤマオセラス」です．

元々，ヨコヤマオセラスとは，直径 10 cm 程度で，殻の外周部に 2 列の小さな突起ができる種類のアンモナイトだと考えられていました．それとは別に，20 cm 程度まで大きくなるアンモナイトとして，「ネオプゾシア」という種類も発見されていました．ただ，このネオプゾシアの中には，やはり直径が 10 cm 程度の小さな種類がいました．とはいえ，どの種類のネオプゾシアの殻にも突起はないので，ヨコヤマオセラスとは先祖も異なる，まったく違う系統のアンモナイトだと考えられていました．

しかし 1993 年に，ヨコヤマオセラスとネオプゾシアは，子供のころの形や，殻の表面にできる凹凸（肋）やくびれの形が，非常によく似ていることがわかりました．また，古い時代のヨコヤマオセラスには突起があるのですが，時代が進むと，その突起は弱くなり，ついには突起がなくなります．“小さい種類のネオプゾシア”とは，進化の結果，突起がなくなったヨコヤマオセラスだったのです．こうして，ヨコヤマオセラスとネオプゾシアは，同じ種類だということが判明しました．



図中の左側の列は，元々「ヨコヤマオセラス」と呼ばれていたアンモナイト．時代が進むと，突起がなくなり，最終的に「ネオプゾシア」の小型タイプになることがわかりました．またヨコヤマオセラスは，ネオプゾシアの大型タイプとも，子供のころは姿形の区別がつきません．したがって両者は，同じ種類だったのです (Maeda, 1993 を改変).